

特別講演

どう迎えるか 2020東京オリンピック ・パラリンピック

スポーツジャーナリスト 株式会社スポーツコミュニケーションズ
代表取締役 二宮 清純 氏



専門店秋の大会

2019年

2019年10月29日、東京・霞が関の東海大学交友会館にて「専門店秋の大会」が開催されました。特別講演にはスポーツジャーナリストの二宮清純氏を講師にお招きし、今年開催の東京オリンピック・パラリンピックをはじめとするスポーツビジネスの現在と注目の取り組みについて語っていただきました。小売りの世界でも応用できるヒントがたくさんあります。

ラグビー日本代表に見る 「一億総活躍社会」実現のヒント

本日は東京オリンピック・パラリンピックを中心に、スポーツに材をとつてビジネスのお役に立つようなお話をさせていただこうと思います。

2019年はラグビーワールドカップ日本大会がおおいに盛り上がりました。日本代表チームはこれまで9回出場していますが今回初めてベスト8、決勝トーナメント進出となりました。ヘッドコーチがジェイミー・ジョセフ氏、キャプテンがリーチ・マイケル氏と、日本の将来を体現するような多様性に富んだチームでした。

ジェイミー・ジャパンには、いわゆる「一億総活躍社会」を実現するヒントが3つあります。すなわち「居場所」「役割」「出番」です。誰にも居場所があり、誰にも役割があり、誰にも出番がやってくるということです。日本代表選手は全部で31人います。一度に試合に出られるのは15人で、1番から15番までポジション

で番号が決まっていますから、必然的に16番より後ろの選手は補欠となります。それを「エイミージャパン」では補欠ではなく「インパクトプレイヤー」と呼んで、ほとんどのメンバーを起用しました。補欠とインパクトプレイヤーでは響きがまた違いますよね。選手にたずねるとみんな自信を持てるようになつたそ

うです。20番ぐらいの背番号をつけた選手でも後半の大重要なときに出番があるんだと思うとチームに対する忠誠心、ロイヤルティが出てくる。やりがいがあると話していました。

日本の企業も見習いたいですね。たとえば「非正規社員」といったネガティブな呼び方は変えていきたいと感じました。実際は細部に宿るといいますが、改革というのは小さなことから始めなければいけません。

メールよりも相手を見ながらのコミュニケーションを

デイー・ジョーンズ氏も就任早々あるルールを決めました。食事中の携帯電話の使用禁止です。下を向いてスマホをいじるのではなく、先輩が後輩にアドバイスするなど選手同士が会話をする時間に切り替えました。

おかげでチームのコミュニケーションが改善し、2015年のワールドカップで強豪の南アフリカにも勝つことができました。しょせんメールは業務連絡と同じでコミュニケーションではないと彼に教わりました。相手の目をしっかりと見て話すことが大切なんですね。

前大会でヘッドコーチを務めた工

ところが「ちゃんと会って飯でも食つても良い人でした。誤解してました

リーダーに就くべきは結果を出せる
豊臣秀吉が人格者だったかどうかは
わからぬ。しかし歴史に名を残す
ことができたのは、結果を出したか
らです。これはビジネスシーンにお
いてもいえるかもしません。

人間なんだ」と。確かに織田信長や
豊臣秀吉が人格者だったかどうかは
わからぬ。しかし歴史に名を残す
ことができたのは、結果を出したか
らです。これはビジネスシーンにお
いてもいえるかもしません。

と後悔しているんです（笑）。

メールでばかりやりとりしていた
ライライラがエスカレートしていき
ます。できるだけ直接会話して、時
間がないなら電話にしなさいといつ
ています。やはりメールだけだと
人間関係が結ばれていませんから、
相互の信頼関係がありません。それ
はコミュニケーションとは似て非な
るもの。自覚していないとミスの原
因にもなり、とても危険だと思つて
います。

女性やファミリーに優しい 施設が収益に貢献

豊臣秀吉が人格者だったかどうかは
わからぬ。しかし歴史に名を残す
ことができたのは、結果を出したか
らです。これはビジネスシーンにお
いてもいえるかもしません。

たとえば広島東洋カープの本拠地、
広島市民球場（マツダスタジアム）
の設計はすごいですよ。新幹線の車
窓からも試合が見えて高揚感をかき
たたれます。女性用トイレの仕様
も一新。広島駅からの歩道と球場を
窓からも試合が見えて高揚感をかき
たたれます。女性用トイレの仕様
も一新。広島駅からの歩道と球場を

る施設や環境の価値を最適化・最大
化することです。

広島市民球場（マツダスタジアム）
の設計はすごいですよ。新幹線の車
窓からも試合が見えて高揚感をかき
たたれます。女性用トイレの仕様
も一新。広島駅からの歩道と球場を

つなぐプロムナードは長さ約200
m、幅約10m、傾斜角度1/20（5%）
のゆるやかなスロープにして車椅子
やベビーカーの方も来場しやすい構
造にしました。その結果、3世代で
訪れるファミリーや「カープ女子」
がたくさん応援に来るようになり、
今ではスタジアムでのグッズ収入が
年間60億円にものぼるそうです。

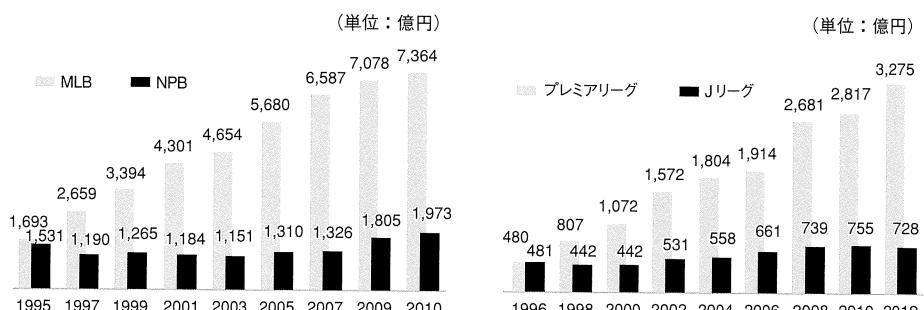
ちょっと古いデータですが、世界

現在、スポーツビジネスの世界で
は放映権料をめぐるビジネスから
ファシリティマネジメントへとシフ
トしています。自分たちが持つてい
ます。できるだけ直接会話して、時
間がないなら電話にしなさいといつ
ています。やはりメールだけだと
人間関係が結ばれていませんから、
相互の信頼関係がありません。それ
はコミュニケーションとは似て非な
るもの。自覚していないとミスの原
因にもなり、とても危険だと思つて
います。

現今、スポーツビジネスの世界で
は放映権料をめぐるビジネスから
ファシリティマネジメントへとシフ
トしています。自分たちが持つてい
ます。できるだけ直接会話して、時
間がないなら電話にしなさいといつ
ています。やはりメールだけだと
人間関係が結ばれていませんから、
相互の信頼関係がありません。それ
はコミュニケーションとは似て非な
るもの。自覚していないとミスの原
因にもなり、とても危険だと思つて
います。

2016年6月「スポーツ未来開拓会議」中間報告
(スポーツ庁/経済産業省)

日本と世界のスポーツ市場規模の差



2016年6月「スポーツ未来開拓会議」中間報告(スポーツ庁/経済産業省)

余談ですがそのエディー・ジョン
ソン氏についてある選手がこう語つ
ていました。「彼の行いや言動につい
ては日本代表メンバーから少なから
ず批判があつたけれども、彼のおか
げで勝利を積み重ねることができた。
リーダーに就くべきは結果を出せる

アメリカのMLB（メジャーリー
グベースボール）、イギリスのサッ
カー・プレミアリーグと比較しても、
95年あるいは96年の時点ではほとん
ど規模が変わらなかつた。にもかか
わらず相手は右肩上がりです。よつ
きり数字に現れています。以前はメ
ジャーリーグのトップクラスの選手
を日本のチームが招聘していました。
サッカーも世界のスーパースターが

どんどん日本にやつてきて、ヨーロッパが危機感を抱いたほどです。このスポーツ市場規模の差は日本の現状だと私は思います。努力しない者はその地位を奪われます。やはり企業努力は大切です。

ルールを戦略的に変えていく 文化を日本にも

さて本題のオリンピック・パラリンピックです。もめていますね（笑）。マラソンと競歩は札幌での開催が決まりました。本来は10月に開催すべきところを、収入の約7割をテレビ放映権料に頼っている国際オリンピック委員会からすれば、秋にはメジャーリーグやヨーロッパのサッカーなどがシーズンに入ることも

あつて真夏しか空いている時間がない。そんな大人の事情があります。といって、女子マラソンで出場選手の4割超が途中棄権したドーハの世界陸上の二の舞は踏みたくないという危機感もあつたわけです。

アスリートファーストを謳うなら

当然10月開催にするべきですが、残念なのは、日本はルールを変えられると弱いということです。日本人は

から「成熟」へとパラダイムシフトが起ると考えています。その根拠は高齢化率です。1964年には6%でしたが、2020年は約30%。3人に1人がお年寄りの時代を迎えます。よく「超高齢化社会」と呼ばれます。しかし将来、2060年には高齢化率はなんと約40%にまで達すると見られています。しかも将来、75歳以上の後期高齢者の人数が65～74歳の前期高齢者を上回ると予測され、「重老齢社会」が到来するといわれています。日本人はつねにルールを守る側であり、支配される側でした。この主従関係に終止符を打つために、そろそろ日本の教育を大きく変えていく必要があるのではないかと考えています。

が開通して地下鉄などの整備も進み、どんどん発展をとげていました。世の中でなによりも「効率」が重視されていましたことをご記憶の方も多いと思います。

しかしながら2020年は「成長」

から「成熟」へとパラダイムシフト

高齢化が進む社会において 障害者は未来の私たち

この高齢化率を考えますと、今回はオリンピックよりもパラリンピックの方が重要ではないかと思います。私がパラリンピックに興味を持つようになつたきっかけは、あるパラアスリートとの出会いです。彼の名前は河合純一。盲目のスイマーであり、金メダル5個を含む21個のメダルを獲得しているレジェンドのひとりです。

彼は私に会うなり、「二宮さんは私の後輩なんですよ」といいました。

私が目を丸くしていると、「あなたも20年後、30年後に緑内障や白内障、

その一例として、JR九州では「ななつ星」というクルーズトレインが一番のヒット商品となりました。全車両スイートの客室で、九州の風光明媚な景色を楽しみながら海の幸や山の幸を満喫できます。シルバー世代の人たちを中心に大人気となり、予約がほぼ1年待ちです。最初にこ

その2020東京五輪を、1964年の大会と比較してみましょう。
1964年は高度成長期です。戦後復興を果たし、新幹線や高速道路

の列車を提案したときには「乗り物はスピードが命だ。誰がこんな遅いに乗るか」といわれたそうですが、今日では人々の嗜好性が効率ではなく快適性を追求しています。

の列車を提案したときには「乗り物はスピードが命だ。誰がこんな遅いに乗るか」といわれたそうですが、今日では人々の嗜好性が効率ではなく快適性を追求しています。

オリンピック・パラリンピックのパラダイムシフト

1964年	→	2020年
成長	→	成熟
6%	→	30%
効率	→	快適

(株)スポーツコミュニケーションズ

1964年は高度成長期です。戦後復興を果たし、新幹線や高速道路

の未来の姿なんです」と説明されて、

超高齢化社会の キーワードは「快適」

本から暮らしやすい日本へとシフトするべきでしょう。これからは「効率」に代わって「快適」が重要なキーワードになるはずです。

その一例として、JR九州では「ななつ星」というクルーズトレインが一番のヒット商品となりました。全車両スイートの客室で、九州の風光明媚な景色を楽しみながら海の幸や山の幸を満喫できます。シルバー世代の人たちを中心に大人気となり、予約がほぼ1年待ちです。最初にこ

宮さんご自身でなくともご両親やご家族のどなたかが視力を失う可能性があります。あるいは腰や膝を痛めたり、事故にあって車椅子のお世話になる場合もあります。つまり私たち障害者は二宮さんのような健常者の

そのときに初めてオリンピックとパラリンピックが地続きなのだと気づきました。

なにしろ高齢化率30%です。高齢者になれば必然的に身体の自由が失われます。誰もが障害者になる可能性を持っている以上、パラリンピックを好機としてユニバーサルデザインやバリアフリーといった障害者に対する環境整備は未来の私たちに必ず役立つはずです。私たちの子どもや孫への備えにもなります。

視覚障害者の転落事故に見るバリアフリー教育の必要性

バリアフリーといいますとハード面ばかりが強調されますが、ソフトの部分についても考えなければいけません。これは教育の力が大きいと感じます。

パラインダッカーという視覚障害者によるパラリンピック種目をご存じでしょうか。音が出るボールと相手チームの選手やガイドの声といった聴覚情報によってシュートをきめる競技です。その選手のひとり落合啓士さんが駅の転落事故について語っていました。

日本では視覚障害者の1/3がホームからの転落を経験しているそ



ホした結果、白杖を持つた視覚障害者がホームから転落。幸い、命を失はずにすんだものの重傷を負ってしました。

皆さんや、皆さんのお子さん、お孫さんでも遭遇することがあるかもしれません。学校や家庭、企業でも、自分たちが視覚障害者と無関係ではないことを啓発していかなければこのような悲しい事例は後を絶ちません。今回のパラリンピックで国家開闢以来の相当数の障害者が来日します。もし事故が相次いでしまった東京のブランドイメージもダウンしてしまいます。日本が今後しっかりと組み立てることのひとつです。

うです。なぜこんな惨状が続いているかと申しますと、一番の理由は駅にホームドアが少ないからなんですね。東京の地下鉄などは設置駅が増えてきましたが、まだまだホームドアのないところも散見されます。

そして次に多い原因は、健常者による歩きスマホ。視覚障害のある方は白杖を頼りに歩行します。ところが人とぶつかった瞬間に進行方向がずれてしまい、ホームから足を踏み外してしまうのだそうです。

歩きスマホがどれほど危険か。私が知っているケースをひとつ挙げましょう。ある高校生が駅で歩きスマ

アのことを「Games Maker（ゲームズメイカー）」と呼んでいました。この名称、とても良いですね。射撃の人たちに救われたといつていきましたよ。本番であまりいいパフォーマンスができなかつたにもかかわらず、最後まで笑顔と拍手をおくつてくれたと感謝していました。

やはり笑顔は大事ですね。オリンピック・パラリンピックをきっかけに東京や日本のリピーターになってもらうためには、日本人が笑顔で海外の人々を迎えることが一番です。日本が招致のときにアピールした「おもてなし」とは、まさにこうした小さなことから始まるのではないでしょうか。どうか2020年の東京五輪を支えるつもりで、笑顔の大切さをよくご存じの皆さんから発信していただければと思います。

二宮 清純氏 プロフィール

1960年、愛媛県生まれ。スポーツ紙や流通紙の記者を経てフリーのスポーツジャーナリストとして独立。オリンピック、サッカーワールドカップ、メジャーリーグ、ボクシングなど国内外で幅広い取材活動を展開中。「スポーツ名勝負物語」「勝者の思考法」「スポーツを『見る』技術」など著書多数。